



『勝負の流儀』

宇喜多広生

「ねえ、ひとつゲームをしましょうよ」

彼女はそう言って微笑んだ。

いつものバーのいつもの客同士のいつもの言葉遊び。

最初はそう思った。

だがその笑みはなぜか非常に魅惑的で、それでいて彼女のいつもの大人びた優しい微笑とは少し異なる、まるで楽しい悪戯をみつけた少女のような笑顔に誘われて、僕は彼女のゲームの内容というのを聞く気になっていた。

そんな彼女の言葉から始まったゲームだった。

そう。

それは単なるゲーム。

ただの遊戯。

簡単な遊びと戯れ。

それだけで終わるはずだった。

あれから三ヶ月が経った。

今、僕は彼女からの電話を待っている。

僕は完全にこのゲームの敗者なのだろう。

だけどそんな僕が今、考えていることは、彼女にどうやって敗北を認めさせるか、である。

言っていることに齟齬があると思うが、これは僕の勝負の流儀だ。

ゲームの勝敗ではない、僕自身のルールに基づくもう一つの勝負。

彼女は非常に魅力的な女性だ。

会話は機知に富み、頭の回転の速い彼女は僕の会話に華やかさというエッセンスを盛り込んでくれる。

それはこの三ヶ月の間そうであることをより深くに理解した。

無論、それはあくまでも僕の見解であって、それは彼女の本質のほんの一部でしかないのかもしれない。

それでも僕は、僕の心と身体は彼女を求めた。

『理想』なんてものは儚い幻想だと理解しているつもりだ。

以前からそうであったが、彼女は確かに僕の理想の女性足り得る、いや理想に限りなく近い女性であった。

そんな彼女がどんなゲームを思いついたかと言うと、僕と彼女が三ヶ月間、彼氏彼女のフリをするというのである。

三ヶ月。

付き合いだした男女が出会って別れるに一番妥当な期間ではないかしら？

と彼女は言うのである。

その真偽は定かではないが、言われてみればなるほどと思えなくもない。

その三ヶ月、恋人のフリをし続けた僕らが、別れてからどうなるかというのをシミュレートし

てみよう。

簡単に言ってしまうえばそんなゲームだった。

僕も彼女も、かなりの間フリーで居た。お互いフリーランスな身の上だ。三ヶ月という期間、そんなごっこ遊びをすることになんら不安を感じる要素はない。

だから僕は彼女の言うゲームに乗ることにした。

勝敗を決めるのは、別れてから、電話をかけた者が負けである。

別れてから、電話をかけたくなるほどに、相手にのめり込んでしまうことこそが敗北となるのだ。

結果から言ってしまうえば。

僕は彼女にのめり込んでしまっていた。

いつからかと言われれば、非常に答えるのに窮するが、おそらくは何年か前に出会った時から始まっていたのかもしれない。

僕はその時、ある結末を予想してこう確認した。

「それはあくまでも相手に電話をしたら負けってことだね？」

彼女は僕の確認を理解ととったのか「そうよ」と短く答えて微笑んだ。

ただでさえ美人な彼女のその魅力的な笑みに圧倒されながら、僕はそのゲームに承諾した。

その瞬間から、僕と彼女は恋人同士になったのだ。

彼女は非常に魅力的だった。

その内容については語る言葉を僕は持っていない。

筆舌に尽くしがたいとはよくぞ言ったものである。

昔の人はなんとも素晴らしい言葉を遺してくれたものである。

僕は彼女とのデートを何度も重ねていき、何度も肌を重ねた。

僕は長らく忘れていた人肌の温もりと優しさを実感していた。

彼女の部屋にも何度か入れてもらった。

仲間内ではプライベートに関しては鉄壁のガードを誇る彼女の私室に招き入れられることは、男として誇りと感じない訳ではなかったが、嬉しく感じたことは確かだ。

週末には彼女の部屋で、二人で買い込んだ缶ビールを空けていくのは、それが遊戯であることを忘れさせるほどに楽しく有意義な時間のように思えた。

そして瞬く間に三ヶ月が過ぎた。

僕は今、彼女の電話を待っている。

いつものバーでロックグラスを弄びながら。

本来ならば彼女から電話はおろか、メールすら届くことは二度とは無い筈である。

お互いの携帯のアドレスを消去したのだから。

彼女の携帯に残る僕のアドレスは、僕自身の手で完全に抹消したのだ。

アドレス帳はもちろん、メールや通話の記録まで徹底して消去した。

それがこのゲームの条件であるから。

お互いに連絡する手段を完全に絶って、なお連絡をしたくなる。

それこそがこのゲームの敗北を意味するのだ。

だから僕はある賭けに出た。

ある仕込みを彼女の部屋に仕掛けてきたのだ。

彼女なら必ずそこに気が付くはずである。

几帳面な彼女の性格をこの三ヶ月で把握したつもりである。

もしも読みが外れるのであるなら、それこそ僕は完全に負けを認めざるを得ない。

僕はただ、未だ鳴らない電話を待っている。

「ズルいわ」

それが彼女の第一声だった。

「ああ」

僕はその謂われある誹りに対して短く頷いた。

お互い言いたいことがたくさんあるのに、何から先に伝えればいいのかもどかしい時間が過ぎる。

刹那の永遠。

そんな言葉を感じた矢先に彼女が言葉を紡いだ。

「あんなのズルいわ」

「.....そうだね」

「.....」

怒りとも、憤りとも、呆れともつかない沈黙が携帯の向こうから流れる。

その中に微かながら安堵の息づかいが聞こえてくる。

僕はそれを確認してからとどめの言葉を言い放った。

「それでも、このゲームは僕の勝ちなんだろう？」

「.....っ！」

はっと息を飲む声を受話器越しに伝わってきた。

何か言いたそうな、間が流れる。ここで何か言えばおそらくは失敗だと、僕は彼女の言葉を待った。

「.....そうね.....そういうルールだったわね.....」

彼女はことさら『ルール』という単語に力を入れて言った。要は僕のしたことがルール違反だと非難しているようにも聞こえる。

僕らは数日後に会う約束だけして、その電話を切った。

数週間ぶりに再会した僕らは、先日の電話のまま、気まずい感じであった。

ただ彼女の方は数日の間に言いたいことを整理してきたのか、言いたいことを言っていた。

僕の方はただただそんな彼女の声を聞いてぼんやりしていた。

怒っていようが笑っていようが関係なかった。

再びこうして彼女と会えることこそが僕の望みだったのだ。それが叶った今、それ以上何も望むことなどなかった。

「ちょっと、聞いているの？」

少し苛立った様子で彼女は僕に問いただしてきた。

しまった、さすがに少しぼんやりしすぎたか。

「もう、絶対そっちからかけてくるって思っていたのに.....」

ともかくにも、僕から電話をしなかったことに対して彼女は怒っているらしい。

つまりそれは僕が彼女にぞっこんだってことはもうすっかり知られていた、ということだ。

だからこそ、姑息な手段で彼女から電話をさせた僕がどうにも腹立たしいらしい。

しかしそれは逆に、敢えて自惚れて言わせてもらえるならば、彼女も僕に会いたがっていた、と考えてもいいのだろう。

とにかくその日の彼女の言葉は、

「卑怯よ」

「今回はノーカウントよ」

「絶対にそっちから電話するもんだとばかり……」

の繰り返しである。

まあ、つまりはとっとと僕から電話してほしかったということである。

冷静に考えてみれば、もしかしたら彼女は僕にゲームを持ちかけてきた時点で、僕は罠にはめられていたのかもしれない。

まあ、それをあんな手で返されてしまったのだ。彼女の憤りもわからなくはなかった。

……そして。

あれから一年が過ぎた。

僕と彼女のゲームはまだ終わらない。

そう。

僕と彼女は、まだ恋人の振りをし続けているのだ。

こんな楽しいゲームを簡単に終わらせたくない。

その気持ちは僕も彼女も同じなのだろう。面と向かって確かめたことはないが、おそらくはそうに違いない。

その後、彼女はなにかことあるごとに、僕にあの言葉を言わそうとする。僕はその言葉を危うく何度も口に出しそうになるのだが、それはこのゲームのエンディングにたどり着くフラグを立ててしまうことになる。

それまでにはもう少しこのゲームを楽しんでもいいじゃないか。

僕は僕で、彼女がこのゲームのコンティニューを選び続けるように会話をし向ける。

頭の良い彼女にそれを悟らせつつOKを出させるのは毎回結構骨が折れるんだ。

でもお互いにその関係を楽しんでいる。

それが僕と彼女の勝負の流儀なのだ。

最後に僕がどんな方法で彼女に電話をかけさせたか、言っておかないといけない。

僕は彼女の家に入れてきた缶ビールの箱の中に、紙を入れておいたんだ。

そう、僕らの最初のゲームの期限が来る少し前に、二人で買ってきた缶ビールの段ボールケースの底に、だ。

その紙に僕はこう書いた。

「好きだ。電話して欲しい。090-XXXX-XXXX」

彼女は今でも、あれは卑怯だ、と僕を責める。

僕はそれをいつも苦笑いで受け流すのだった。